

## 巖谷小波の俳句

—巖谷家所蔵「巖谷小波絵はがきコレクション」を出発点として—

大阪国際児童文学振興財団 土居安子

巖谷家所蔵「巖谷小波絵はがきコレクション」全1116点(1890-1964)のうち、小波が家族宛てに書いている絵はがきが310通、小波宛ての絵葉書が691通あり、年代にもかなりばらつきがあるものの、貴重な資料が多く含まれている。そしてその中には小波の俳句ネットワークにかかわる絵葉書が多く見られる。小波自身が俳句を書いている絵はがきは15通あり、小波以外の俳句が掲載されている絵はがきは115通ある。また、小波が句会から帰って来たと伝えている絵はがきが1通、俳句にかかわる内容の小波宛の絵はがきが74通ある。つまり、小波宛約691通のうち、189通、約27%が俳句関連の絵はがきである。俳句または俳句についての小波宛絵はがきの差出人は、100人を超え、小波の俳句ネットワーク広さがうかがえる。

小波は、若い頃から俳句にかかわるさまざまな組織に属していた。まずは、尾崎紅葉をはじめとする硯友社系の人と、1890(明治23)年、紫吟社(硯友社)にかかわり、そこから、紅葉や角田竹冷らが創立した秋声会(1894(明治27)年)、1913(大正2)年武田鶯塘主宰の『南柯』に参加した。

また、1892(明治25)年12月からの「京都日出新聞」主筆時代には、花の本聴秋の句会に参加したり、「京都日出新聞」の金子静枝や中川四明(霞城)などの記者たちで作った瞳々会(1894(明治27)年1月第一回)に参加して、句会も行ったりしていた。そして、瞳々会には東京へ戻ってからでも参加していた。加えて「京都日出新聞」時代には、俳書を積極的に収集していた。それらは、のちに『俳文学大系』全12巻(巖谷小波、伊藤松宇、橋本小舸/編輯 大鳳閣書房 1929(昭和4)年10月～1930(昭和5)年9月)などに結実する。

小波は博文館入館(1894(明治27)年12月)後、1896(明治29)年3月、自宅に寄食している黒田湖山、尾上新兵衛、西村渚山、生田葵山たちと木曜会を開始する。ここでも句会を行った。小波は、1900(明治33)年9月にベルリン大学附属東洋語学校の講師となるが、翌年1月には白人会が発足し、宗匠となる。白人会は帰国してからも続いた。

これらに加えて、絵はがき交換会である「水鳥会」(1905(明治38)年1月開始)でも鹿塩秋菊や久保田米斎らと俳句をよむと同時に、口演童話で国内外を巡りながら句会をしたり、俳画を描いたりしていた<sup>1</sup>。

また、『少年世界』をはじめとする少年少女雑誌において小波の俳句を掲載したり、投稿欄で俳句を募集したりも行った。

本報告では、これらの小波と俳句のかかわりをまとめ、絵はがきを起点に俳句にかかわる小波のネットワーク状況と、小波の俳句に対する考え方、発表媒体について報告し、小波と俳句のかかわりについて考察することとする。

---

<sup>1</sup> 小波と俳句については、金成妍「俳人・巖谷小波」(彩筆の軌跡を追って—巖谷さざなみのお伽俳画発掘記—)『巖谷小波 おとぎの世界』求龍堂 2020年3月)に概要がまとめられている。